

研究機関名：東北大学

受付番号： 2014-1-38
研究課題名 過敏性腸症候群における蛋白分解酵素薬の腸内細菌叢に対する効果に関する検討
研究期間 西暦 2014 年 5 月（倫理委員会承認後）～ 2015 年 3 月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（便検体）
上記材料の採取期間 西暦 2009 年 3 月～2011 年 2 月
意義、目的 有病率が高い消化器疾患である過敏性腸症候群の病態生理についてはまだ十分には理解されていない。腸内細菌ととその代謝産物は、消化管免疫、消化管透過性、内臓痛の制御に影響を及ぼすことが知られている。 そこで今回我々は、過敏性腸症候群患者の腸内細菌叢は健常者の腸内細菌叢とは異なっており、蛋白分解酵素阻害薬であるメシル酸カモスタットによって腸内細菌叢が正常化するという仮説を検証する。
方法 本研究では、2009 年 3 月から 2011 年 2 月までの間に研究課題「過敏性腸症候群における食物不耐性の役割と蛋白分解酵素薬の有効性に関する検討」（受付番号 2008-120）の参加者から同意を得て採取された便材料の一部を使用するものである。 過敏性腸症候群患者はメシル酸カモスタットによる治療開始前日と 14 日目に、健常者はバロスタット検査前に採取された便の一部を用いる。数グラムの便を専用容器に採取し、速やかに-80℃で凍結保存する。その便上清を取り出し、次世代シーケンサーを用いて腸内フローラ解析を実行する。得られた結果について治療開始前の患者群と健常者群、ならびに患者群における治療前後で比較する。さらに、前回の研究課題で測定した質問票ならびに採血・生理検査の結果を用いて今回測定する腸内細菌叢の結果との関連性を評価する。 腸内細菌叢の解析にあたっては、匿名化して誰のものかわからないようにした上で便検体を扱う。なお、本研究課題はヒトゲノム解析を行うものではない。
問い合わせ・苦情等の窓口 仙台市青葉区星陵町 2 - 1 東北大学大学院医学系研究科 行動医学分野 教授 福土 審（実施責任者） 行動医学分野 講師 金澤 素（実施担当者） 電話：022-717-8162